令和５年度全国学力・学習状況調査　守口市の結果概要

令和５年９月２６日　守口市教育委員会

１．調査の目的
- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

２．調査の対象
- 小学校及び義務教育学校前期課程　第６学年（学校数：14校　886人参加）
- 中学校及び義務教育学校後期課程　第３学年（学校数：８校　856人参加）

３．調査の内容
- 教科に関する調査
  （小学校：国語、算数 / 中学校：国語、数学、英語）
- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
  （児童生徒に対する調査 / 学校に対する調査）

４．実施日
- 令和５年４月１８日（火）
  ※中学校英語は各中学校が指定された日に実施

教科に関する結果

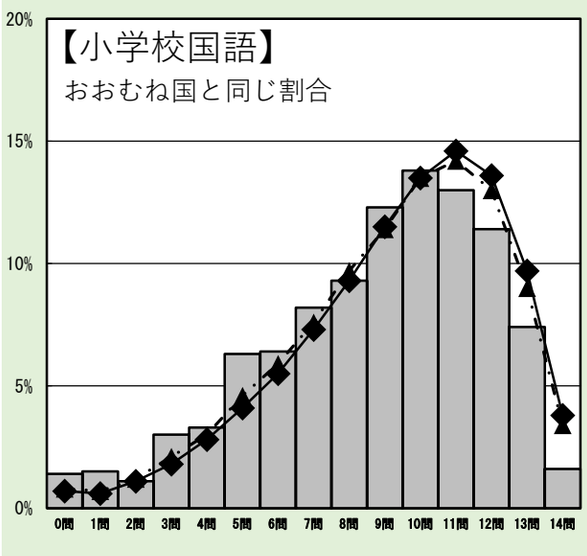
学力が着実に定着している
（全国平均との差は１問以内）

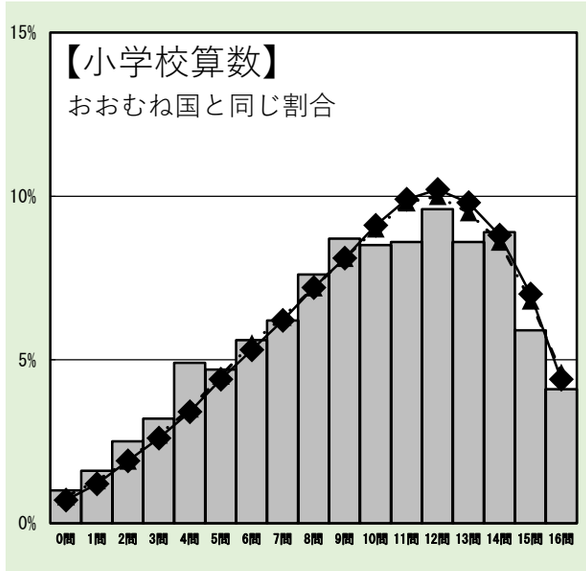
平均正答数		守口市	大阪府	全国
小学校	国語（14問中）	8.7	9.2	9.4
	算数（16問中）	9.6	9.9	10.0
中学校	国語（15問中）	9.9	10.2	10.5
	数学（15問中）	7.0	7.5	7.6
	英語（17問中）	6.8	7.7	7.7

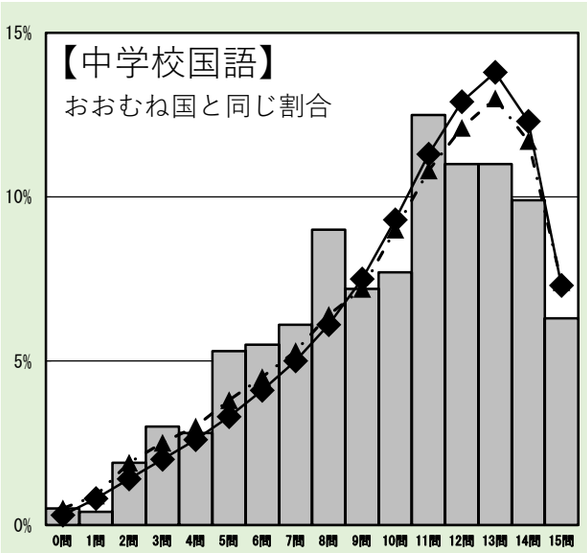
【今年度調査の特徴】
- ■中学校で4年ぶりに英語を実施。併せて、「話すこと」調査が実際に生徒が発声して解答する方式で行われた。
- ■児童生徒質問紙調査は、学習用タブレット端末を使ったオンライン方式で実施された。

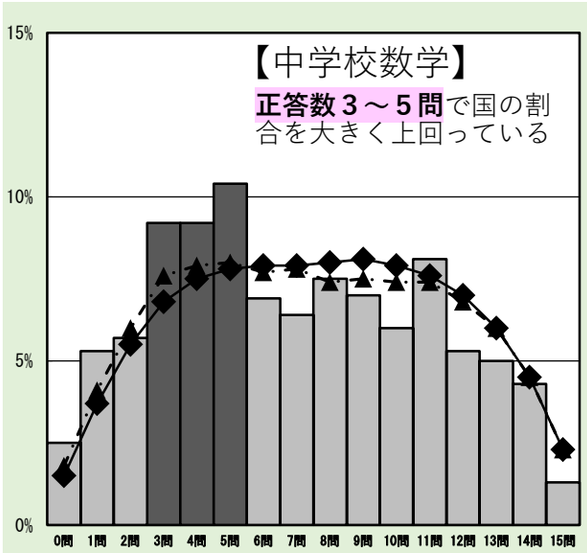
正答数分布グラフ(横:正答数、縦:割合)

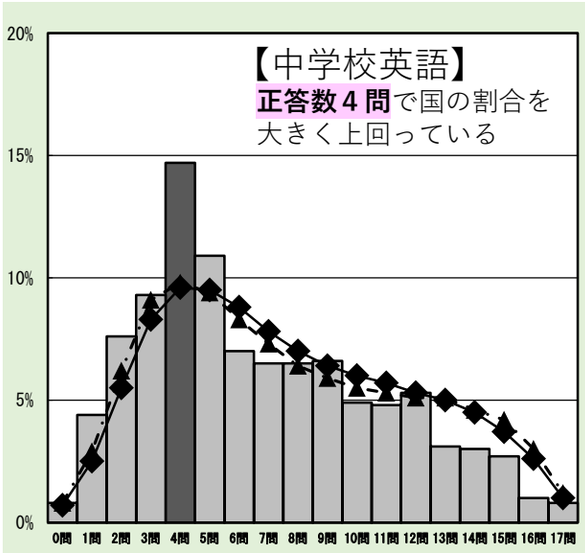
守口市　大阪府　全国











問題別の主な状況

○成果　●課題　（　）内は平均正答率

小学校国語

○選択肢から資料に書かれた内容が要約された見出しを選ぶ問題は多くの児童ができた（86.7%）。また、「漢字を文の中で正しく使うこと」は、全国の平均正答率を上回った。
●「資料から読み取った情報をもとに、いくつかの条件を満たしてわかったことを書く」問題ができた児童は少なく（22.1%）、『書く力』に課題がある。

小学校算数

○「表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めたり、比例の関係ではないことを説明した文の空欄に適切な表の数字を入れる」問題は、多くの児童ができた（85%以上）。
●「正三角形の意味や性質について理解すること」ができた児童は少ない（23.1%）。また、「高さが等しい三角形で、底辺を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること」もできた児童は少なく（27.1%）「図形」の理解に課題がある。

中学校国語

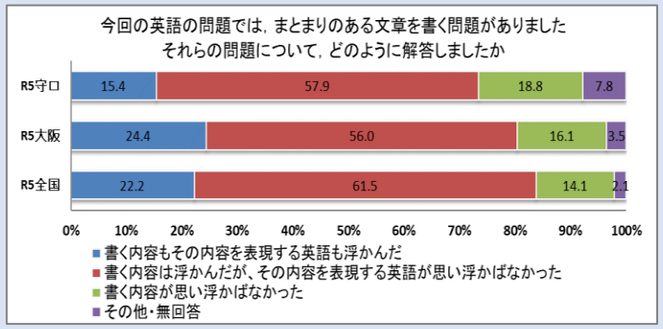
○ 目的や場面に応じた質問内容を選択肢から選ぶ問題は、多くの生徒ができた（85.7%）。また、「漢字を正しく書くこと」は、全国の平均正答率を上回った。
●「文章の構成や展開の工夫について引用を用いて考えを書くこと」ができた生徒は少ない（44.2%）。問題文で提示された条件を満たして書く練習が必要である。

中学校数学

○「問題の指示を明確にとらえて計算する」は、多くの生徒ができた（88.0%）。また、「三角形の合同を基に平行を証明すること」は、全国の平均正答率を上回った。
●新学習指導要領から学ぶことになった「箱ひげ図」（グラフ）から読み取った内容を説明する問題ができた生徒は少なく（30%未満）、『データの活用』に大きな課題がある。

中学校英語

○「情報を正確に聞き取ること」は、多くの生徒ができた（72.4%）。
●「相手に依頼する表現に書き換える」問題ができた生徒は少ない（24.1%）。また、全国や大阪府と同様に「日常的な話題について、事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文章を書くこと」ができた生徒は顕著に少なく（5.6%）、無解答率も高い〔26.5%〕。



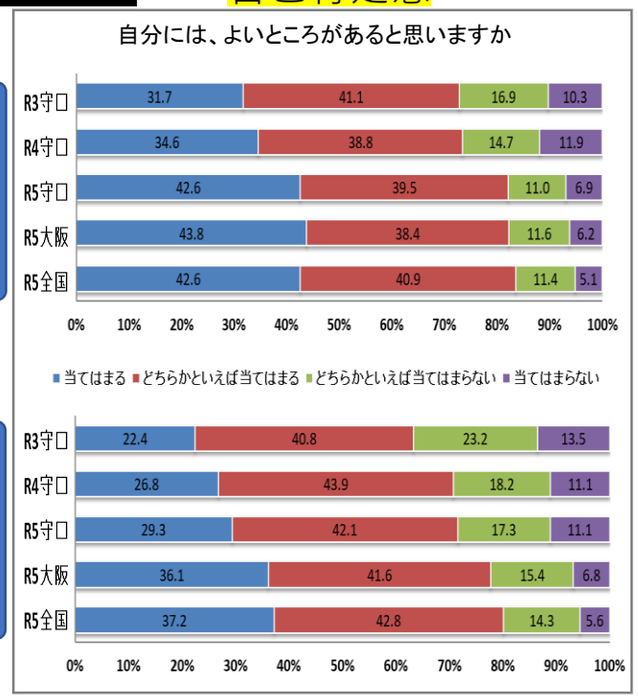
上のグラフのように、書く意欲がある生徒は７割以上だが、適切に表現ができず、また、何を書いていいかわからずに書けなかった生徒は8割以上いる。
　このことをふまえて、英語で自分の考えを伝え合うコミュニケーション活動を、小・中学校一貫して系統的に推進する必要がある。

- **◆今回実施されたすべての教科で、問題文の内容を適切に読み取ることができず、正答に必要な条件を満たして答えることができなかった児童生徒が多く見られた。**
- **◆何を問われているのか、どんな条件を示されているのか、提示された複数の資料から自分の考えの根拠になるものは何か、等『書く力』とあわせて『読む力』の育成が必要不可欠である。**
- **◆日頃から、読む機会を意識し、新聞や雑誌等の媒体を読むことで、何を伝えようとしているかを考える経験を積むことが大切である。**

児童生徒質問紙・学校質問紙　調査結果

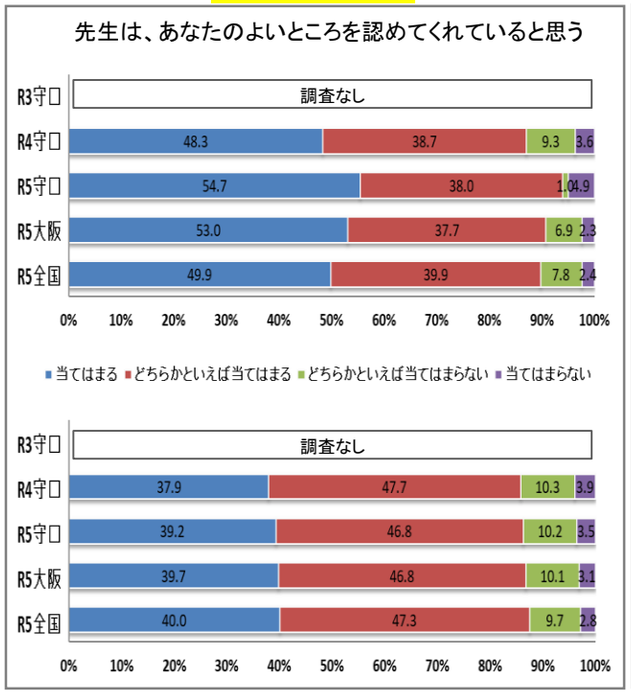
児童生徒質問紙

自己肯定感



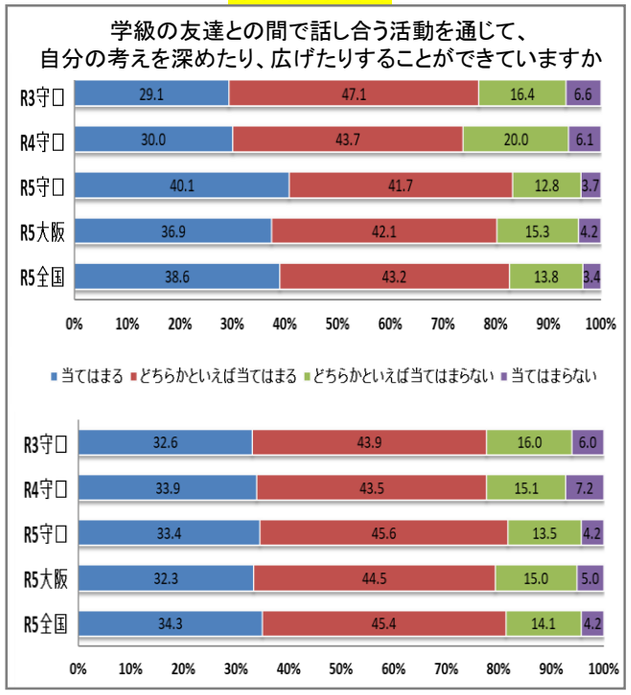
自分には、よいところがあると回答した割合が、年々増加。今回は特に、小学校で大きく増加。

自己肯定感



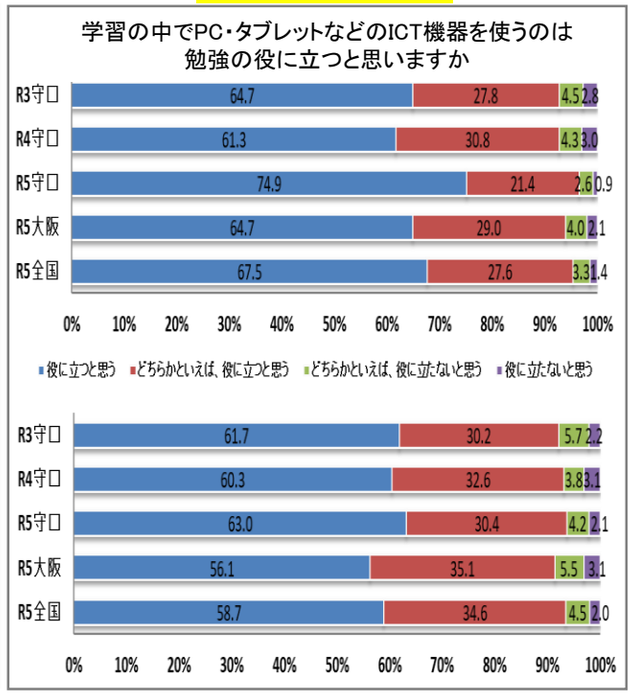
先生は、自分のよいところを認めてくれると思う割合が増加し、小学校では、全国を上回った。教職員が子どもを認めることで、自分のよいところを意識できるようになっていくと考えられる。

授業改善



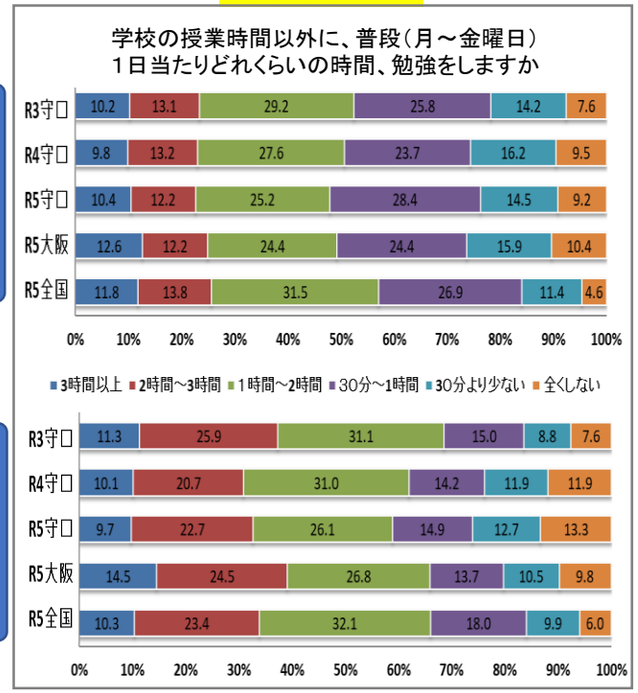
話し合う活動を取り入れていることで、考えを深めたり、広げたりすることができていると回答した割合が小・中学校とも増加し、小学校では全国を上回った。

ICT機器の活用



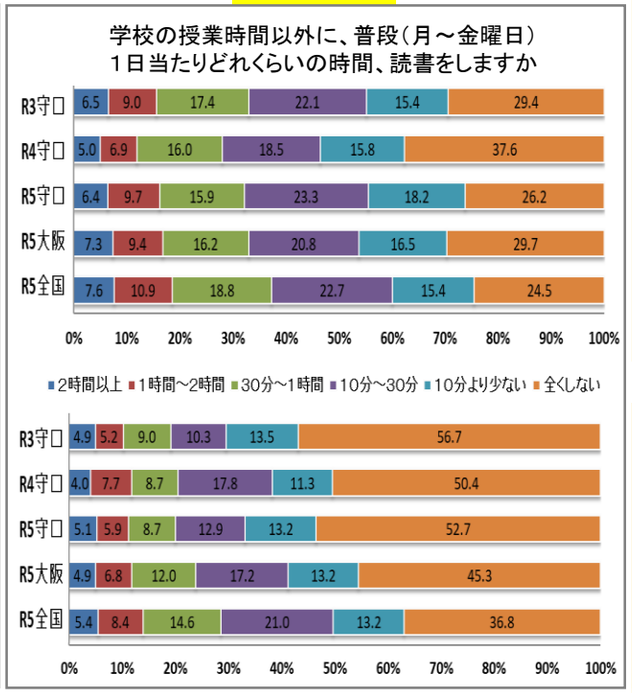
ICT機器が勉強に役立つと感じている割合が小・中学校とも増加し、全国を上回った。日々の教育活動での効果的な活用の結果と考えられる。

自学自習力



小学校は増加したものの、中学校は減少した。小学校で身につけた学習習慣を中学校で維持できるような取組みが必要である。
（小学校：３０分以上/中学校：１時間以上）

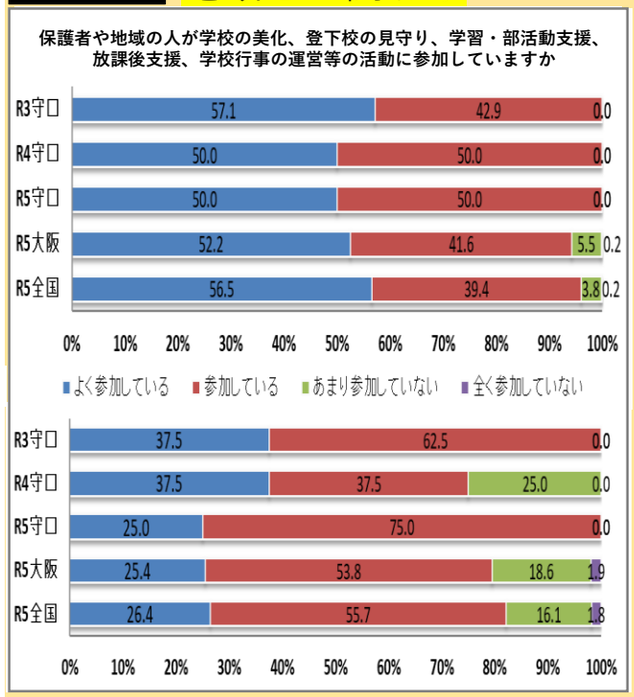
読書習慣



「全く読まない」割合が小学校は大幅に減少した一方、中学校では増加。読書で得られる情報や経験、心の動きなどを実感させ、自ら「読みたい」と思わせるような読書推進の取組みが必要である。

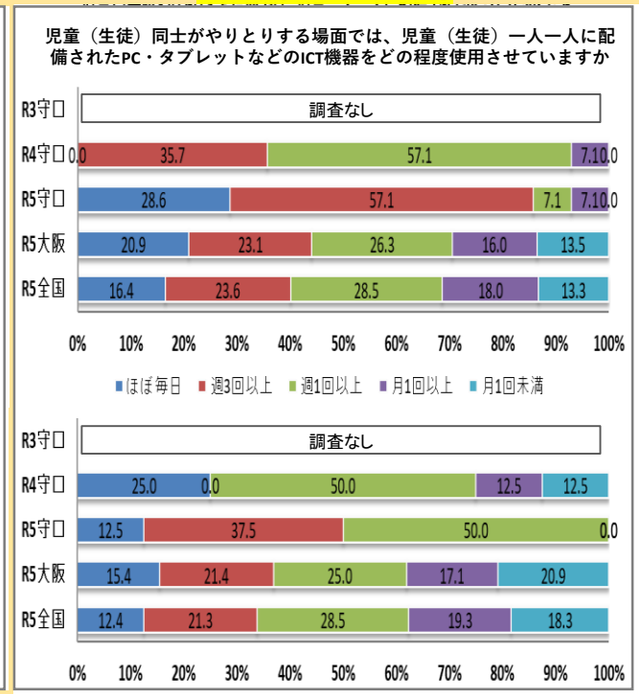
学校質問紙

地域との関わり



小・中学校とも肯定的回答が100％で、地域との連携が活発であることがわかる。小中一貫教育の原動力として、引き続き、コミュニティスクールの活動を通した連携の強化が必要である。

ICT機器の活用



小・中学校ともに大幅に使用頻度が増加。授業の中で、ICT機器が日常的に活用され、教職員が意識して取り組んだ結果が表れている。